

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	柴山 昌宣
主な担当科目	オペラ演習II,オペラ公演実習,オペラ特別演習①,オペラ特別演習②,実技個人レッスン[声楽Ⅰ①,声楽Ⅰ②,声楽Ⅰ③,声楽Ⅰ④,音楽芸術表現実技(声楽)①,声楽]
シラバス	次ページをご参照ください
2022年の教育目標・授業に臨む姿勢	コロナは下火になってきた印象はあるが確実に学生の大学生活は今までのものとは大きく変貌を遂げている。マスク生活は相手の表情をしっかりと読み取る力は衰えさせた。それを上回るだけのコミュニケーション力も持ち合わせない学生と対峙した時に、丁寧にしかりと学生と向かい合える器を我々指導者は持たなければならない。
2022年の教育に関する自己評価	25名を数える声楽実技の学生を担当する指導者として、学年の縦の繋がりや心のハーモニーを育ませるべく、試演会や親睦会などを感染防止と戦いながら企画することが出来たことは近年に比べ大きな進歩を実感する。その中で感じることは学生はポーカーフェースで過ごし、十分な距離を保てないと崩壊してしまうということだ。どこまでを学生の判断に委ねて、どの場面で助言をすべきであるかを常に自問自答している。
2022年のFD活動に関する自己評価	声楽学内組織の最大の懸案事項は学生の獲得である。そのことを声楽の学内組織FD研修会で議論出来たことは大変貴重な時間だった。但し中学でも高校でもコロナによって部活動等が一旦停止した影響は直ぐには収まらない。日々が過ぎていく中で出来ることは積極的に音楽の楽しさを呼びかけ続けることしかない。
授業改善のために取り入れた研修内容	FD合同研修会学内組織ごとのグループで「新しい時代の大学人に求められることとは」について論じた際に、多くの先生方からはどんな時代でも本物を追求する心と、音楽を好きであることを忘れない気持ち、というご意見が出た。それは日々追われる学生たちへ自責の念も込めて伝えていきたい。

科目名－クラス名

オペラ演習Ⅱ

A

曜日時限

火 3時限

担当教員

柴山 昌宣

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験				授業内小テスト	
演習	4～	通年	2	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	0	100
				30	0	0	70	0	

教育到達目標と概要

これまでオペラ演習①→②→③において「オペラの楽しさ」を段階的に学んできたが、選択授業であるオペラ演習Ⅱ(A,Bクラス)では更に本格的にオペラに触れる事で、よりオペラを身近に感じる事を目的とする。

学生の自主性を大切にしながら、ソリストとしてのオペラ体験を实践する機会とし、歌唱力・演技力・アンサンブル能力の向上を目指す。

課題として、モーツァルト、ドニゼッティ等のオペラ作品を取り上げ、音楽作りから演出を加えた舞台表現の演習を行なう。

学修成果

①ソリストとして一つの役柄に音楽と演技の両面から取り組むことより、表現の多様性と深さ、協調性を身に付けることができる。

②レチタティーヴォも含め、言葉と音楽の結びつきや構造への理解を深めることができる。

③ソリストとしてのスコアの勉強の仕方、指揮者や演出家との関係性、舞台上での個々の客観的な見方などを知ることができる。

授業展開と内容

第1回	履修希望者全員の声聴きを実施し、各演目(愛の妙薬、コジ・ファン・トゥッテ)にクラス分けし、配役を行う
第2回	主にレチタティーヴォを中心にイタリア語の正しい発音やアクセントを学ぶ
第3回	歌唱の際の正確な楽譜の読み取り方を学ぶ
第4回	自分のパートの楽譜をしっかりと読み込んだ上で、相手のパートの音楽を意識する事を学ぶ
第5回	ピアノ伴奏譜にはオーケストレーションが書き込まれている事を意識し、それぞれの楽器の特徴を意識して歌唱する事を学ぶ
第6回	アンサンブルの場合の音程・リズムをしっかりと意識して、ハーモニー感を持って歌う事を学ぶ
第7回	歌唱する際に指揮者を意識出来るよう、しっかり自分のパートを暗譜する
第8回	相手役の部分やオーケストレーションを含めて正確に暗譜を行う
第9回	スコアに書き込まれた喜怒哀楽を、呼吸によって表現出来る事を学ぶ
第10回	呼吸、言葉、感情などの表現を指揮に合わせて歌唱する事を学ぶ
第11回	自分の表現がしっかりと客席に伝わっているかを学生同士で聴き合い、意見交換を行う
第12回	これまでの授業での注意事項がしっかりと身に付いていることを確認しながら歌唱を行う
第13回	ドラマの進行通りに、通し稽古を行う
第14回	本番と同じ状態で最終的なリハーサルを行う
第15回	A,Bクラス合同で前期の成果発表を行う お互いに感想をフィードバックすることで、後期の課題を明確にする
第16回	稽古初日から本番を迎えるまでの具合的な進行、心構え等について演出家によるレクチャーを受ける
第17回	前期に学修した演目に身体表現を伴わせるために、音楽面の再確認を行う
第18回	音楽稽古で身に付けた自分の役柄を、実際に身体表現するためのプランを考察する
第19回	相手役との関わりを成立させるために共演者同士で、積極的に意見交換を行う
第20回	演出家の指導のもと、自主的に考察したプランで身体表現を行い、指摘を受けたことを解決していく
第21回	音楽面・演技面の両面から、再度作品へのアプローチを試みる
第22回	スコアから要求されている内容を、身体表現を通して現すための反復練習を行う
第23回	指導を受ける他者への指摘を自分への指摘に置き換えて考察する 反復練習するすることで、より良い表現方法を模索する
第24回	練習を繰り返して、常に最良の音楽的表現・身体表現の可能性を追求する
第25回	積み重ねてきた身体表現が客席を意識されたものかを振り返り、共演者と意見交換をしていく
第26回	通し稽古①を行う(全体としての問題点を確認する) 衣装、道具を使用する
第27回	返し稽古を行う 通し稽古で指摘された問題点を解決していく

第28回	通し稽古②を行う 集中力を持って課題解決に取り組む
第29回	成果発表会と同じ条件でゲネプロを行い、全体の構成を確認する
第30回	A,Bクラス合同で成果発表会を行う A,Bクラスがお互いに鑑賞する事で1年間の学修成果を確認する

履修上の注意

- ・授業形態を十分に理解し授業に臨んでください。
- ・初回授業時の試唱会用に任意の歌曲、またはオペラ・アリアのいずれか1曲を準備し、事前に伴奏譜を提出してください。
- ・授業展開は進行の目安であり、稽古の達成度により内容が前後すること理解して臨んでください。
- ・毎回の授業で歌い演じることが「成果発表」となるので、体調管理に留意してください。
- ・なお大学オペラ公演との兼ね合いから、授業展開・内容、授業時限に変更が生じることがあります。
- ・オリエンテーションおよび初回授業時に授業運用の周知をします。
- ・新型コロナウイルス感染対策をしっかりと遵守してください。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- ・これまで段階的積み重ねてきたオペラ演習の体験をもとに、授業に臨むための準備については十分に取り組んでください。
- ・予習（60分）・復習（60分）を着実に行ない、自己の課題克服に努力を重ねてください。

教科書・参考書

- ・教材については初回授業後に指示しますので、事前に購入の必要はありません。
- ・参考書として、オペラ関連本や対訳本など適宜使用し役立ててください。

科目名－クラス名

オペラ演習Ⅱ

B

曜日時限

火 4時限

担当教員

柴山 昌宣

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計	
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出			成果発表
演習	4～	通年	2	定期試験	30	0	0	70	0	100

教育到達目標と概要

これまでオペラ演習①→②→③において「オペラの楽しさ」を段階的に学んできたが、選択授業であるオペラ演習Ⅱ(A,Bクラス)では更に本格的にオペラに触れる事で、よりオペラを身近に感じる事を目的とする。

学生の自主性を大切にしながら、ソリストとしてのオペラ体験を实践する機会とし、歌唱力・演技力・アンサンブル能力の向上を目指す。

課題として、モーツァルト、ドニゼッティ等のオペラ作品を取り上げ、音楽作りから演出を加えた舞台表現の演習を行なう。

学修成果

- ソリストとして一つの役柄に音楽と演技の両面から取り組むことより、表現の多様性と深さ、協調性を身に付けることができる。
- レチタティーヴォも含め、言葉と音楽の結びつきや構造への理解を深めることができる。
- ソリストとしてのスコアの勉強の仕方、指揮者や演出家との関係性、舞台上での個々の客観的な見方などを知ることができる。

授業展開と内容

- 履修希望者全員の声聴きを実施し、各演目(愛の妙薬、コジ・ファン・トゥッテ)にクラス分けし、配役を行う
- 主にレチタティーヴォを中心にイタリア語の正しい発音やアクセントを学ぶ
- 歌唱の際の正確な楽譜の読み取り方を学ぶ
- 自分のパートの楽譜をしっかりと読み込んだ上で、相手のパートの音楽を意識する事を学ぶ
- ピアノ伴奏譜にはオーケストレーションが書き込まれている事を意識し、それぞれの楽器の特徴を意識して歌唱する事を学ぶ
- アンサンブルの場合の音程・リズムをしっかりと意識して、ハーモニー感を持って歌う事を学ぶ
- 歌唱する際に指揮者を意識出来るよう、しっかり自分のパートを暗譜する
- 相手役の部分やオーケストレーションを含めて正確に暗譜を行う
- スコアに書き込まれた喜怒哀楽を、呼吸によって表現出来る事を学ぶ
- 呼吸、言葉、感情などの表現を指揮に合わせて歌唱する事を学ぶ
- 自分の表現がしっかりと客席に伝わっているかを学生同士で聴き合い、意見交換を行う
- これまでの授業での注意事項がしっかりと身に付いていることを確認しながら歌唱を行う
- ドラマの進行通りに、通し稽古を行う
- 本番と同じ状態で最終的なリハーサルを行う
- A,Bクラス合同で前期の成果発表を行う
お互いに感想をフィードバックすることで、後期の課題を明確にする
- 稽古初日から本番を迎えるまでの具合的な進行、心構え等について演出家によるレクチャーを受ける
- 前期に学修した演目に身体表現を伴わせるために、音楽面の再確認を行う
- 音楽稽古で身に付けた自分の役柄を、実際に身体表現するためのプランを考察する
- 相手役との関わりを成立させるために共演者同士で、積極的に意見交換を行う
- 演出家の指導のもと、自主的に考察したプランで身体表現を行い、指摘を受けたことを解決していく
- 音楽面・演技面の両面から、再度作品へのアプローチを試みる
- スコアから要求されている内容を、身体表現を通して現すための反復練習を行う
- 指導を受ける他者への指摘を自分への指摘に置き換えて考察する
反復練習するすることで、より良い表現方法を模索する
- 練習を繰り返し、常に最良の音楽的表現・身体表現の可能性を追求する
- 積み重ねてきた身体表現が客席を意識されたものかを振り返り、共演者と意見交換をしていく
- 通し稽古①を行う(全体としての問題点を確認する)
衣装、道具を使用する
- 返し稽古を行う
通し稽古で指摘された問題点を解決していく

第28回 通し稽古②を行う
集中力を持って課題解決に取り組む

第29回 成果発表会と同じ条件でゲネプロを行い、全体の構成を確認する

第30回 A,Bクラス合同で成果発表会を行う
A,Bクラスがお互いに鑑賞する事で1年間の学修成果を確認する

履修上の注意

- ・授業形態を十分に理解し授業に臨んでください。
- ・初回授業時の試唱会用に任意の歌曲、またはオペラ・アリアのいずれか1曲を準備し、事前に伴奏譜を提出してください。
- ・授業展開は進行の目安であり、稽古の達成度により内容が前後すること理解して臨んでください。
- ・毎回の授業で歌い演じることが「成果発表」となるので、体調管理に留意してください。
- ・なお大学オペラ公演との兼ね合いから、授業展開・内容、授業時限に変更が生じることがあります。
- ・オリエンテーションおよび初回授業時に授業運用の周知をします。
- ・新型コロナウイルス感染対策をしっかりと遵守してください。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- ・これまで段階的積み重ねてきたオペラ演習の体験をもとに、授業に臨むための準備については十分に取り組んでください。
- ・予習（60分）・復習（60分）を着実に行ない、自己の課題克服に努力を重ねてください。

教科書・参考書

- ・教材については初回授業後に指示しますので、事前に購入の必要はありません。
- ・参考書として、オペラ関連本や対訳本など適宜使用し役立ててください。

科目名－クラス名

オペラ公演実習

曜日時限

火 2時限

担当教員

柴山 昌宣

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
その他	4～	通年	4	評価割合	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

この授業は「オペラ演習Ⅰ④」を踏まえた上で、関係する多くのスタッフと共に公演舞台を想定した稽古場での実習の後、オーケストラ加えた本舞台での実習を行い、公演に向けたお目の実践を体験する。その体験を通してオペラ制作現場で起こる様々な事柄について学び、公演に携わるすべての人々と協働する関係性の上でコミュニケーション能力の涵養につなげる。そして将来の社会生活における自己実現を考察できる基礎力を身につける。

学修成果

①オペラ全曲演奏の体験は、合唱の持つドラマや音楽上の役割への理解を深め、自身の歌唱向上につなげることができる。②舞台の持つ様々な機構や機能を体感・体験することで、総合芸術といわれるオペラ芸術の理解につなげることができる。③舞台に携わる様々な役目を担う人々と協働する関係性から、コミュニケーション能力の涵養に役立てることができる。④劇場という特異な空間での表現体験から、社会生活における自己実現を考察できる基礎力を身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	『Le nozze di Figaro』第1幕合唱部分のディクショント音楽の再確認のための演習①
第2回	『Le nozze di Figaro』第1幕合唱部分のディクショント音楽の再確認のための演習②（キャスト共に）
第3回	『Le nozze di Figaro』第3幕合唱部分のディクショント音楽の再確認のための演習①
第4回	『Le nozze di Figaro』第3幕合唱部分のディクショント音楽の再確認のための演習②（キャスト共に）
第5回	イタリア人演出家によるワークショップ①（ディクション）
第6回	イタリア人演出家によるワークショップ②（身体表現）
第7回	イタリア人演出家によるワークショップ③（キャストと共に）
第8回	第1幕合唱部分の立稽古の実践①（シチュエーションの理解）
第9回	第1幕合唱部分の立稽古の実践②（Aキャストと共に）
第10回	第1幕合唱部分の立稽古の実践③（Aキャストと共にまとめ）
第11回	第3幕合唱部分の立稽古の実践①（シチュエーションの理解）
第12回	第3幕合唱部分の立稽古の実践②（Aキャストと共に）
第13回	第3幕合唱部分の立稽古の実践③（Aキャストと共にまとめ）
第14回	第1幕合唱部分の立稽古の実践①（Bキャストと共に）
第15回	第1幕合唱部分の立稽古の実践②（Bキャストと共にまとめ）
第16回	第3幕の立稽古の実践（Bキャストと共に）
第17回	第3幕の立稽古の実践（Bキャストと共にまとめ）
第18回	全幕通し稽古の実践（Aキャストと共に）
第19回	全幕通し稽古の実践（Bキャストと共に）
第20回	本番舞台での場当たりの実践（A・Bキャストと共に）
第21回	本番舞台での全幕通し稽古の実践（Aキャストと共に）
第22回	本番舞台での全幕通し稽古の実践（Bキャストと共に）
第23回	オーケストラ合わせ①（Aキャストと共に）
第24回	オーケストラ合わせ②（Bキャストと共に）
第25回	公演に向けてのリハーサル（オケ付き舞台稽古）①（Aキャストと共に）
第26回	公演に向けてのリハーサル（オケ付き舞台稽古）②（Bキャストと共に）
第27回	公演に向けてのリハーサル（HP）①（Aキャストと共に）
第28回	公演に向けてのリハーサル（HP）②（Bキャストと共に）
第29回	公演に向けてのリハーサル（GP）①（Aキャストと共に）
第30回	公演に向けてのリハーサル（GP）②（Bキャストと共に）

履修上の注意

オリエンテーションの際にオペラ演習関係授業のガイダンスを行いません。授業展開、授業曜日・時限は、オペラ公演までの稽古日程により変更等が生じますので注意してください。「オペラ公演実習」は「オペラ演習Ⅰ④」に準じた内容で、主に立ち稽古・舞台稽古・オーケストラ合わせ・オーケストラ付き付舞台稽古・GPおよび本公演を充てる特別授業として行います。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

楽譜を深く理解し、自身の声楽技術向上につなげるために、作品の歴史的背景を知る・テキストの意味を調べる・イタリア語を注意深く丁寧に発語しながら譜読みに反映させる、などの予習（60分）・復習（60分）をしっかりと行って準備してください。

教科書・参考書

教科書はW.A.Mozart『Le nozze di Figaro』（ペーレンライター版 但しすでに別版ヴォーカル・スコアを所有している者はその限りではない）を使用します。オリエンテーションの際に購入等の指示をしますので、それまで購入の必要はありません。参考書としてオペラ関連本、対訳本等適宜自由に使用し役立ててください。

科目名－クラス名

オペラ特別演習①

曜日時限

水 3時限

水 4時限

担当教員

柴山 昌宣

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	1～	通年	4	50	0	0	0	50	100

教育到達目標と概要

各個人の声質や役柄のキャラクターを生かし、オペラ歌手に必要な歌唱法及び舞台表現の基礎を総合的に研究する。オペラを創る過程を体感しながらオペラの仕組みを体得していく。前後期ともに其々の研究題材に則した課題の範囲を決め、試演会で発表する。試演会に向けコレペティ稽古、立ち稽古、通し稽古というオペラを創っていく上で定石の過程を踏み、各担当教員から指導を受け、本番までの稽古に臨む。

学修成果

オペラ歌手に必要な歌唱法及び舞台表現の基礎を身に付けることができる。オペラを創る過程を体感しながらオペラの仕組みを体得することができる。

授業展開と内容

第1回	ガイダンス（配役、演目についての説明）
第2回	コレペティ稽古の基礎
第3回	コレペティ稽古の基礎と応用
第4回	コレペティ稽古の応用
第5回	音楽稽古の基礎
第6回	音楽稽古の基礎と応用
第7回	音楽稽古の応用
第8回	立ち稽古の基礎
第9回	立ち稽古の基礎と応用
第10回	立ち稽古の応用
第11回	立ち稽古の実践
第12回	立ち稽古のまとめ
第13回	通し稽古
第14回	ゲネプロ
第15回	本番（試演会）
第16回	ガイダンス（配役、演目についての説明）
第17回	コレペティ稽古の基礎
第18回	コレペティ稽古の基礎と応用
第19回	コレペティ稽古の応用
第20回	音楽稽古の基礎
第21回	音楽稽古の基礎と応用
第22回	音楽稽古の応用
第23回	立ち稽古の基礎
第24回	立ち稽古の基礎と応用
第25回	立ち稽古の応用
第26回	立ち稽古の応用と実践
第27回	立ち稽古の実践
第28回	立ち稽古のまとめ
第29回	通し稽古
第30回	ゲネプロ

履修上の注意

グループで行う授業であり、学修効果を高めるためにも積極的な姿勢で授業に取り組むこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

役に関する十分な研究をして授業に臨む（240分以上/週）

必要に応じて授業外で補講を行う。

前期試演会および後期試験で講評によるフィードバックを行う。

教科書・参考書

必要に応じてその都度、指示を与える。

科目名－クラス名

オペラ特別演習②

曜日時限

金 3時限

金 4時限

担当教員

柴山 昌宣

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	2～	通年	4		50	0	0	0	50	100

教育到達目標と概要

各個人の声質や役柄のキャラクターを生かし、オペラ歌手に必要な歌唱法及び舞台表現の基礎を総合的に研究する。オペラを創る過程を体感しながらオペラの仕組みを体得していく。前後期ともに其々の研究題材に則した課題の範囲を決め、試演会で発表する。試演会に向けコレペティ稽古、立ち稽古、通し稽古というオペラを創っていく上で定石の過程を踏み、各担当教員から指導を受け、本番までの稽古に臨む。

学修成果

オペラ歌手に必要な歌唱法及び舞台表現の基礎を身に付けることができる。オペラを創る過程を体感しながらオペラの仕組みを体得することができる。

授業展開と内容

第1回 ガイダンス（配役、演目についての説明）

第2回 コルペティ稽古の基礎

第3回 コルペティ稽古の基礎と応用

第4回 コルペティ稽古の応用

第5回 音楽稽古の基礎

第6回 音楽稽古の基礎と応用

第7回 音楽稽古の応用

第8回 立ち稽古の基礎

第9回 立ち稽古の基礎と応用

第10回 立ち稽古の応用

第11回 立ち稽古の実践

第12回 立ち稽古のまとめ

第13回 通し稽古

第14回 ゲネプロ

第15回 本番（試演会）

第16回 ガイダンス（配役、演目についての説明）

第17回 コルペティ稽古の基礎

第18回 コルペティ稽古の基礎と応用

第19回 コルペティ稽古の応用

第20回 音楽稽古の基礎

第21回 音楽稽古の基礎と応用

第22回 音楽稽古の応用

第23回 立ち稽古の基礎

第24回 立ち稽古の基礎と応用

第25回 立ち稽古の応用

第26回 立ち稽古の応用と実践

第27回 立ち稽古の実践

第28回 通し稽古

第29回 H. P.

第30回 G. P.

履修上の注意

グループで行う授業であり、学修効果を高めるためにも積極的な姿勢で授業に取り組むこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

役に関する十分な研究をして授業に臨む（240分以上/週）

必要に応じて授業外で補講を行う。

前期試演会および修了オペラ公演で講評によるフィードバックを行う。

教科書・参考書

必要に応じてその都度、指示を与える。

科目名－クラス名

声楽Ⅰ①

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	1～	通年	6	評価方法	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は、大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスンである。ベルカント唱法に基いた呼吸～発声～共鳴に至るまでの歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。1年次は30分の個人レッスンを週2回（計60分）行う。担当教員と曲目を選定し、イタリア語の正確な発音を学ぶとともに、発声の基本的な訓練を積み重ねながら少しずつ歌う身体を作っていく。実技試験の課題曲は前期・後期とも「イタリア古典歌曲1曲(4分以内)」 実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- ①歌唱の基本（発声、呼吸、支え等）を身につけ、ベルカント唱法の基礎力を高めることができる。
- ②イタリア語の正確な発音を覚えることができる。
- ③イタリア古典歌曲（1792年のRossini生誕以前の作曲者による作品）のレパートリーを作り、演奏法や様式感を理解することができる。

授業展開と内容

第1回	歌う姿勢
第2回	呼吸法
第3回	身体の使い方
第4回	発声練習（開口母音）
第5回	発声練習（閉口母音）
第6回	正確な音程
第7回	正確なリズム
第8回	イタリア語の正しい発音(母音)
第9回	イタリア語の正しい発音(子音)
第10回	歌詞の理解
第11回	歌詞の表現
第12回	フレーズと音楽づくり
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	歌う姿勢と重心
第17回	呼吸法とプレス
第18回	発声練習と身体の使い方（開口母音）
第19回	発声練習と身体の使い方（閉口母音）
第20回	正確な音程と歌い方
第21回	正確なリズムと歌い方
第22回	イタリア語の正しい発音とポジション（音読）
第23回	イタリア語の正しい発音とポジション(歌唱)
第24回	歌詞の理解力の向上
第25回	歌詞の表現力の向上
第26回	古典歌曲の様式感
第27回	古典歌曲の音楽表現
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読だけではなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

歌詞の意味を調べ音読すること。毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集 その他、担当教員から指示のあった任意の歌曲集、コンコーネなどの声楽教本

科目名－クラス名

声楽Ⅰ①

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	1～	通年	6	評価方法	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は、短大での学びの根幹となる主科実技の個人レッスンである。ベルカント唱法に基いた呼吸～発声～共鳴に至るまでの歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。1年次は30分の個人レッスンを週2回（計60分）行う。担当教員と曲目を選定し、イタリア語の正確な発音を学ぶとともに、発声の基本的な訓練を積み重ねながら少しずつ歌う身体を作っていく。実技試験の課題曲は前期・後期とも「イタリア古典歌曲1曲(4分以内)」 実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- ①歌唱の基本（発声、呼吸、支え等）を身につけ、ベルカント唱法の基礎力を高めることができる。
- ②イタリア語の正確な発音を覚えることができる。
- ③イタリア古典歌曲（1792年のRossini生誕以前の作曲者による作品）のレパートリーを作り、演奏法や様式感を理解することができる。

授業展開と内容

第1回	歌う姿勢
第2回	呼吸法
第3回	身体の使い方
第4回	発声練習（開口母音）
第5回	発声練習（閉口母音）
第6回	正確な音程
第7回	正確なリズム
第8回	イタリア語の正しい発音(母音)
第9回	イタリア語の正しい発音(子音)
第10回	歌詞の理解
第11回	歌詞の表現
第12回	フレーズと音楽づくり
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	歌う姿勢と重心
第17回	呼吸法とプレス
第18回	発声練習と身体の使い方（開口母音）
第19回	発声練習と身体の使い方（閉口母音）
第20回	正確な音程と歌い方
第21回	正確なリズムと歌い方
第22回	イタリア語の正しい発音とポジション（音読）
第23回	イタリア語の正しい発音とポジション(歌唱)
第24回	歌詞の理解力の向上
第25回	歌詞の表現力の向上
第26回	古典歌曲の様式感
第27回	古典歌曲の音楽表現
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。

レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

歌詞の意味を調べ音読すること。

毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集 その他、担当教員から指示のあった任意の歌曲集、コンコーネなどの声楽教本

科目名－クラス名

声楽Ⅰ①

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	1～	通年	6	評価方法	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は、大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスンである。ベルカント唱法に基いた呼吸～発声～共鳴に至るまでの歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。1年次は30分の個人レッスンを週2回（計60分）行う。担当教員と曲目を選定し、イタリア語の正確な発音を学ぶとともに、発声の基本的な訓練を積み重ねながら少しずつ歌う身体を作っていく。実技試験の課題曲は前期・後期とも「イタリア古典歌曲1曲(4分以内)」 実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- ①歌唱の基本（発声、呼吸、支え等）を身につけ、ベルカント唱法の基礎力を高めることができる。
- ②イタリア語の正確な発音を覚えることができる。
- ③イタリア古典歌曲（1792年のRossini生誕以前の作曲者による作品）のレパートリーを作り、演奏法や様式感を理解することができる。

授業展開と内容

第1回	歌う姿勢
第2回	呼吸法
第3回	身体の使い方
第4回	発声練習（開口母音）
第5回	発声練習（閉口母音）
第6回	正確な音程
第7回	正確なリズム
第8回	イタリア語の正しい発音(母音)
第9回	イタリア語の正しい発音(子音)
第10回	歌詞の理解
第11回	歌詞の表現
第12回	フレーズと音楽づくり
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	歌う姿勢と重心
第17回	呼吸法とプレス
第18回	発声練習と身体の使い方（開口母音）
第19回	発声練習と身体の使い方（閉口母音）
第20回	正確な音程と歌い方
第21回	正確なリズムと歌い方
第22回	イタリア語の正しい発音とポジション（音読）
第23回	イタリア語の正しい発音とポジション(歌唱)
第24回	歌詞の理解力の向上
第25回	歌詞の表現力の向上
第26回	古典歌曲の様式感
第27回	古典歌曲の音楽表現
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読だけではなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

歌詞の意味を調べ音読すること。毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集 その他、担当教員から指示のあった任意の歌曲集、コンコーネなどの声楽教本

科目名－クラス名

声楽Ⅰ②

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	2～	通年	6	評価方法	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。イタリア古典歌曲に加え、イタリアベルカントの代表的作曲家及びVerdiの歌曲まで時代を広げて勉強する。実技試験課題は、前期「イタリア古典歌曲又はRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの歌曲1曲(4分以内)」後期「Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの歌曲1曲(4分以内)」実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- 歌唱の技術を理解し、ベルカント唱法の基礎力を向上させることができる。
- イタリア古典歌曲(1792年のRossini生誕以前の作曲家による作品)のレパートリーを作り、演奏法と様式感を理解することができる。
- イタリアベルカントの代表的な作曲家(Rossini,Donizetti,Bellini)及びVerdiの室内歌曲のレパートリーを作り、その演奏法と様式感を理解することができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声練習
第2回	共鳴、身体の使い方の練習
第3回	イタリア語ディクッション(音読)
第4回	イタリア語ディクッション(歌唱)
第5回	正確な音程とリズム
第6回	イタリア古典歌曲及びRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の様式感
第7回	イタリア古典歌曲及びRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の演奏法
第8回	イタリア語(レチタティーヴォを含む)の正しい発音と歌い方
第9回	歌詞の理解
第10回	歌詞の表現
第11回	時代・様式にあった音楽づくり
第12回	時代・様式にあった表現方法
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ(暗譜)
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の向上
第17回	共鳴、身体の使い方の理解と向上
第18回	イタリア語ディクッションとポジション(音読)
第19回	イタリア語ディクッションとポジション(歌唱)
第20回	正確な音程とリズムを作る能力の向上
第21回	Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の様式感
第22回	Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の演奏法
第23回	イタリア語(レチタティーヴォを含む)の正しい発音と歌い方の向上
第24回	歌詞の理解力の向上と表現
第25回	歌詞の表現力の向上と歌唱
第26回	時代・様式にあった音楽づくりと表現
第27回	時代・様式にあった表現方法と歌唱
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ(暗譜)
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。体調管理を怠らないこと。レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。
オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。毎日の練習を積み上げる努力をすること。
一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集、Rossini, Donizetti, Bellini, Verdiの歌曲集 その他、担当教員から指示のあった任意の曲集、コンコーネなどの声楽教本など

科目名－クラス名

声乐Ⅰ②

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	2～	通年	6	評価方法	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は短大での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。イタリア・ベルカントの代表的作曲家及びVerdiまでの室内歌曲の他、日本歌曲、オペラアリアまでを学生の進捗、能力に合わせて学んでいく。実技試験は前期「Rossini, Donizetti, Bellini, Verdiの歌曲1曲(4分以内)」 後期「日本歌曲と自由曲(イタリア語のもの)各1曲(7分以内)」 実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- 歌唱の技術を理解し、ベルカント唱法の基礎力を向上させることができる。
- イタリア・ベルカントの代表的な作曲家（Rossini, Donizetti, Bellini）及びVerdiの室内歌曲やオペラアリアのレパートリーを作り、その演奏法と様式感を理解することができる。
- 日本歌曲のレパートリーを作ると同時に、詩や曲を通じて日本人の心を深く味わい、それを表現することができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声練習
第2回	共鳴、身体の使い方の練習
第3回	イタリア語ディクッション（音読）
第4回	イタリア語（歌唱）
第5回	正確な音程とリズム
第6回	イタリア古典歌曲及びRossini, Donizetti, Bellini, Verdiの室内歌曲の様式感
第7回	イタリア古典歌曲及びRossini, Donizetti, Bellini, Verdiの室内歌曲の演奏法
第8回	イタリア語（レチタティーヴォを含む）の正しい発音と歌い方
第9回	歌詞の理解
第10回	歌詞の表現
第11回	時代・様式にあった音楽づくり
第12回	時代・様式にあった表現方法
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の向上
第17回	共鳴、身体の使い方の理解と向上
第18回	イタリア語・日本語 ディクッションとポジション（音読）
第19回	イタリア語・日本語 ディクッションとポジション（歌唱）
第20回	正確な音程とリズムを作る能力の向上
第21回	Rossini, Donizetti, Bellini, Verdiの室内歌曲、オペラアリア及び日本歌曲の様式感
第22回	Rossini, Donizetti, Bellini, Verdiの室内歌曲、オペラアリア及び日本歌曲の演奏法
第23回	イタリア語（レチタティーヴォを含む）・日本語の正しい発音と歌い方の向上
第24回	歌詞の理解力の向上と表現
第25回	歌詞の表現力の向上と歌唱
第26回	時代・様式にあった音楽づくりと表現
第27回	時代・様式にあった表現方法と歌唱
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。

レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。

毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集、Rossini, Donizetti, Bellini, Verdiの歌曲集、日本歌曲集 その他、担当教員から指示のあった任意の曲集、コンコーネなどの声楽教本など

科目名－クラス名

声楽Ⅰ②

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
実技・実習	2～	通年	6	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。イタリア古典歌曲に加え、イタリアベルカントの代表的作曲家及びVerdiの歌曲まで時代を広げて勉強する。実技試験課題は、前期「イタリア古典歌曲又はRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの歌曲1曲(4分以内)」後期「Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの歌曲1曲(4分以内)」実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- 歌唱の技術を理解し、ベルカント唱法の基礎力を向上させることができる。
- イタリア古典歌曲(1792年のRossini生誕以前の作曲家による作品)のレパートリーを作り、演奏法と様式感を理解することができる。
- イタリアベルカントの代表的な作曲家(Rossini,Donizetti,Bellini)及びVerdiの室内歌曲のレパートリーを作り、その演奏法と様式感を理解することができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声練習
第2回	共鳴、身体の使い方の練習
第3回	イタリア語ディクッション(音読)
第4回	イタリア語ディクッション(歌唱)
第5回	正確な音程とリズム
第6回	イタリア古典歌曲及びRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の様式感
第7回	イタリア古典歌曲及びRossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の演奏法
第8回	イタリア語(レチタティーヴォを含む)の正しい発音と歌い方
第9回	歌詞の理解
第10回	歌詞の表現
第11回	時代・様式にあった音楽づくり
第12回	時代・様式にあった表現方法
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ(暗譜)
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の向上
第17回	共鳴、身体の使い方の理解と向上
第18回	イタリア語ディクッションとボジション(音読)
第19回	イタリア語ディクッションとボジション(歌唱)
第20回	正確な音程とリズムを作る能力の向上
第21回	Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の様式感
第22回	Rossini,Donizetti,Bellini,Verdiの室内歌曲の演奏法
第23回	イタリア語(レチタティーヴォを含む)の正しい発音と歌い方の向上
第24回	歌詞の理解力の向上と表現
第25回	歌詞の表現力の向上と歌唱
第26回	時代・様式にあった音楽づくりと表現
第27回	時代・様式にあった表現方法と歌唱
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ(暗譜)
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンであるため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。体調管理を怠らないこと。レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。
オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。毎日の練習を積み上げる努力をすること。
一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

イタリア古典歌曲集、Rossini, Donizetti, Bellini, Verdiの歌曲集 その他、担当教員から指示のあった任意の曲集、コンコーネなどの声楽教本など

科目名－クラス名

声乐 I ③

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	3～	通年	6	評価方法	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。2年次までの歌曲に加え、学生個々の能力・進度に合わせてオペラアリア、近代歌曲など範囲を広げて学んでいく。実技試験課題は、前期・後期とも「自由曲1曲(イタリア語のもの)(5分以内) ※オペラアリアの場合、Verdi以降の作品は除く」試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- ①歌唱の技術を理解し、ベルカントに基いた歌唱力を向上させることができる。
- ②各々の楽器(声)に合った歌曲やオペラアリアのレパートリーを作り、その演奏法と様式感を身につけることができる。
- ③レチタティーヴォの歌い方を覚え、身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声練習
第2回	共鳴、身体の使い方の練習
第3回	イタリア語ディクシオン (音読)
第4回	イタリア語ディクシオン (歌唱)
第5回	レチタティーヴォの歌い方 (レチタティーヴォ・セッコ)
第6回	レチタティーヴォの歌い方 (レチタティーヴォ・アッコムパニャート)
第7回	カデンツァ・修飾音などの歌い方
第8回	アジリタ・ポルタメントなどの歌い方
第9回	歌詞・作品の理解
第10回	歌詞・作品の理解と表現
第11回	時代・様式にあった音楽づくり
第12回	時代・様式にあった表現方法
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ (暗譜)
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の向上
第17回	共鳴、身体の使い方の向上
第18回	イタリア語ディクシオンの向上 (音読)
第19回	イタリア語ディクシオンの向上 (歌唱)
第20回	レチタティーヴォの歌い方の向上 (レチタティーヴォ・セッコ)
第21回	レチタティーヴォの歌い方の向上 (レチタティーヴォ・アッコムパニャート)
第22回	カデンツァ・修飾音などの歌い方 (ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第23回	アジリタ・ポルタメントなどの歌い方 (ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第24回	歌詞・作品の理解力の向上
第25回	歌詞・作品の理解と表現力の向上
第26回	時代・様式にあった音楽づくりの向上
第27回	時代・様式にあった表現方法の向上
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ (暗譜)
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンのため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。実技試験でオペラアリアを歌う場合Verdi以降の作品は除くこと。

レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。

毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

担当教員から指示のあった任意の歌曲集、アリア集など

科目名－クラス名

声乐 I ③

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	3～	通年	6	評価種別	100	0	0	0	0	100
				評価割合						

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。2年次までの歌曲に加え、学生個々の能力・進度に合わせてオペラアリア、近代歌曲など範囲を広げて学んでいく。実技試験課題は、前期・後期とも「自由曲1曲(イタリア語のもの)(5分以内) ※オペラアリアの場合、Verdi以降の作品は除く」試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- ①歌唱の技術を理解し、ベルカントに基いた歌唱力を向上させることができる。
- ②各々の楽器(声)に合った歌曲やオペラアリアのレパートリーを作り、その演奏法と様式感を身につけることができる。
- ③レチタティーヴォの歌い方を覚え、身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声練習
第2回	共鳴、身体の使い方の練習
第3回	イタリア語ディクシオン (音読)
第4回	イタリア語ディクシオン (歌唱)
第5回	レチタティーヴォの歌い方 (レチタティーヴォ・セッコ)
第6回	レチタティーヴォの歌い方 (レチタティーヴォ・アッコンパニヤート)
第7回	カデンツァ・修飾音などの歌い方
第8回	アジリタ・ポルタメントなどの歌い方
第9回	歌詞・作品の理解
第10回	歌詞・作品の理解と表現
第11回	時代・様式にあった音楽づくり
第12回	時代・様式にあった表現方法
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ (暗譜)
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の向上
第17回	共鳴、身体の使い方の向上
第18回	イタリア語ディクシオンの向上 (音読)
第19回	イタリア語ディクシオンの向上 (歌唱)
第20回	レチタティーヴォの歌い方の向上 (レチタティーヴォ・セッコ)
第21回	レチタティーヴォの歌い方の向上 (レチタティーヴォ・アッコンパニヤート)
第22回	カデンツァ・修飾音などの歌い方 (ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第23回	アジリタ・ポルタメントなどの歌い方 (ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第24回	歌詞・作品の理解力の向上
第25回	歌詞・作品の理解と表現力の向上
第26回	時代・様式にあった音楽づくりの向上
第27回	時代・様式にあった表現方法の向上
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ (暗譜)
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンのため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。実技試験でオペラアリアを歌う場合Verdi以降の作品は除くこと。

レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。

毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

担当教員から指示のあった任意の歌曲集、アリア集など

科目名－クラス名

声楽Ⅰ④

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	4～	通年	6	評価種別	100	0	0	0	0	100
				評価割合						

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。学生個々の声種・能力・進度に合わせてオペラアリア、近代歌曲、日本歌曲など幅広いレパートリーを学んでいく。

実技試験課題は、前期「自由曲1曲(イタリア語のもの)(6分以内) ※オペラアリアの場合、Verdi以降の作品は除く」後期「イタリア歌曲または日本歌曲と自由曲(イタリア語)各1曲(10分以内)」 試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- ①歌唱の技術を理解し、ベルカントに基いた歌唱力を更に向上させることができる。
- ②各々の楽器(声)に合った歌曲(日本歌曲を含む)やオペラアリアのレパートリーを作り、様式感のある演奏法と表現力を身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声技術の向上
第2回	共鳴、身体の使い方の向上
第3回	イタリア語ディクシオン力の向上(音読)
第4回	イタリア語ディクシオン力の向上(歌唱)
第5回	レチタティーヴォの歌い方の向上(レチタティーヴォ・セッコ)
第6回	レチタティーヴォの歌い方の向上(レチタティーヴォ・アコンパニヤート)
第7回	カデンツァ・修飾音などの歌唱技術の向上
第8回	アジリタ・ポルタメントなどの歌唱技術の向上
第9回	歌詞・作品の理解力の向上
第10回	歌詞・作品の理解と表現力の向上
第11回	時代・様式にあった音楽づくりの向上
第12回	時代・様式にあった表現方法の向上
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ(暗譜)
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の更なる鍛錬
第17回	共鳴、身体の使い方の更なる鍛錬
第18回	イタリア語・日本語 ディクシオン力の習得(音読)
第19回	イタリア語・日本語 ディクシオン力の習得(歌唱)
第20回	レチタティーヴォの歌い方の習得(レチタティーヴォ・セッコ)
第21回	レチタティーヴォの歌い方の習得(レチタティーヴォ・アコンパニヤート)
第22回	カデンツァ・修飾音などの歌唱技術の向上(ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第23回	アジリタ・ポルタメントなどの歌唱技術の向上(ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第24回	歌詞・作品の理解力の習得
第25回	歌詞・作品の理解と表現力の習得
第26回	時代・様式にあった音楽づくりの習得
第27回	時代・様式にあった表現方法の習得
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ(暗譜)
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンのため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。

実技試験でオペラアリアを歌う場合Verdi以降の作品は除くこと。

レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。

毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

担当教員から指示のあった任意の歌曲集、アリア集など

科目名－クラス名

声楽Ⅰ④

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	4～	通年	6	評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は大学での学びの根幹となる主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。学生個々の声種・能力・進度に合わせてオペラアリア、近代歌曲、日本歌曲など幅広いレパートリーを学んでいく。

実技試験課題は、前期「自由曲1曲(イタリア語のもの)(6分以内) ※オペラアリアの場合、Verdi以降の作品は除く」後期「イタリア歌曲または日本歌曲と自由曲(イタリア語)各1曲(10分以内)」 試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- ①歌唱の技術を理解し、ベルカントに基いた歌唱力を更に向上させることができる。
- ②各々の楽器(声)に合った歌曲(日本歌曲を含む)やオペラアリアのレパートリーを作り、様式感のある演奏法と表現力を身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声技術の向上
第2回	共鳴、身体の使い方の向上
第3回	イタリア語ディクシヨンの向上(音読)
第4回	イタリア語ディクシヨンの向上(歌唱)
第5回	レチタティーヴォの歌い方の向上(レチタティーヴォ・セッコ)
第6回	レチタティーヴォの歌い方の向上(レチタティーヴォ・アコンパニヤート)
第7回	カデンツァ・修飾音などの歌唱技術の向上
第8回	アジリタ・ポルタメントなどの歌唱技術の向上
第9回	歌詞・作品の理解力の向上
第10回	歌詞・作品の理解と表現力の向上
第11回	時代・様式にあった音楽づくりの向上
第12回	時代・様式にあった表現方法の向上
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ(暗譜)
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の更なる鍛錬
第17回	共鳴、身体の使い方の更なる鍛錬
第18回	イタリア語・日本語 ディクシヨンの習得(音読)
第19回	イタリア語・日本語 ディクシヨンの習得(歌唱)
第20回	レチタティーヴォの歌い方の習得(レチタティーヴォ・セッコ)
第21回	レチタティーヴォの歌い方の習得(レチタティーヴォ・アコンパニヤート)
第22回	カデンツァ・修飾音などの歌唱技術の向上(ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第23回	アジリタ・ポルタメントなどの歌唱技術の向上(ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第24回	歌詞・作品の理解力の習得
第25回	歌詞・作品の理解と表現力の習得
第26回	時代・様式にあった音楽づくりの習得
第27回	時代・様式にあった表現方法の習得
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ(暗譜)
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンのため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。

実技試験でオペラアリアを歌う場合Verdi以降の作品は除くこと。

レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。

毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

担当教員から指示のあった任意の歌曲集、アリア集など

科目名－クラス名

声乐

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	1～	通年	0	評価種別	100	0	0	0	0	100
				評価割合						

教育到達目標と概要

この科目は大学研究生の主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。これまでの勉強を更に発展させ、個々の能力・進捗・楽器(声)に合った課題を勉強していく。実技試験は前期「自由曲1曲(6分以内)」後期「歌曲と自由曲各1曲(10分以内)」実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- ・歌唱の技術を理解し、ベルカント唱法の基礎力を向上させることができる。
- ・個々の楽器(声)に合ったレパートリーを作り、その演奏技術、様式感を身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声練習
第2回	共鳴、身体の使い方の練習
第3回	イタリア語ディクッション (音読)
第4回	イタリア語ディクッション (歌唱)
第5回	レチタティーヴォの歌い方 (レチタティーヴォ・セッコ)
第6回	レチタティーヴォの歌い方 (レチタティーヴォ・アッコンパニヤート)
第7回	カデンツァ・修飾音などの歌い方
第8回	アジリタ・ポルタメントなどの歌い方
第9回	歌詞・作品の理解
第10回	歌詞・作品の理解と表現
第11回	時代・様式にあった音楽づくり
第12回	時代・様式にあった表現方法
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ (暗譜)
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の向上
第17回	共鳴、身体の使い方の向上
第18回	イタリア語ディクッションの向上 (音読)
第19回	イタリア語ディクッションの向上 (歌唱)
第20回	レチタティーヴォの歌い方の向上 (レチタティーヴォ・セッコ)
第21回	レチタティーヴォの歌い方の向上 (レチタティーヴォ・アッコンパニヤート)
第22回	カデンツァ・修飾音などの歌い方 (ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第23回	アジリタ・ポルタメントなどの歌い方 (ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第24回	歌詞・作品の理解力の向上
第25回	歌詞・作品の理解と表現力の向上
第26回	時代・様式にあった音楽づくりの向上
第27回	時代・様式にあった表現方法の向上
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ (暗譜)
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンのため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。

実技試験でオペラアリアを歌う場合Verdi以降の作品は除くこと。

レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。

毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

担当教員から指示のあった任意の歌曲集、アリア集など

科目名－クラス名

声乐

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	1～	通年	0	評価方法	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は大学研究生の主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。これまでの勉強を更に発展させ、個々の能力・進捗・楽器(声)に合った課題を勉強していく。実技試験は前期「自由曲1曲(6分以内)」後期「歌曲と自由曲各1曲(10分以内)」実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- ・歌唱の技術を理解し、ベルカント唱法の基礎力を向上させることができる。
- ・個々の楽器(声)に合ったレパートリーを作り、その演奏技術、様式感を身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声練習
第2回	共鳴、身体の使い方の練習
第3回	イタリア語ディクシオン（音読）
第4回	イタリア語ディクシオン（歌唱）
第5回	レチタティーヴォの歌い方（レチタティーヴォ・セッコ）
第6回	レチタティーヴォの歌い方（レチタティーヴォ・アッコンパニヤート）
第7回	カデンツァ・修飾音などの歌い方
第8回	アジリタ・ポルタメントなどの歌い方
第9回	歌詞・作品の理解
第10回	歌詞・作品の理解と表現
第11回	時代・様式にあった音楽づくり
第12回	時代・様式にあった表現方法
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の向上
第17回	共鳴、身体の使い方の向上
第18回	イタリア語ディクシオンの向上（音読）
第19回	イタリア語ディクシオンの向上（歌唱）
第20回	レチタティーヴォの歌い方の向上（レチタティーヴォ・セッコ）
第21回	レチタティーヴォの歌い方の向上（レチタティーヴォ・アッコンパニヤート）
第22回	カデンツァ・修飾音などの歌い方（ロマン派の楽曲に多用される様々な形）
第23回	アジリタ・ポルタメントなどの歌い方（ロマン派の楽曲に多用される様々な形）
第24回	歌詞・作品の理解力の向上
第25回	歌詞・作品の理解と表現力の向上
第26回	時代・様式にあった音楽づくりの向上
第27回	時代・様式にあった表現方法の向上
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ（暗譜）
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンのため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。

実技試験でオペラアリアを歌う場合Verdi以降の作品は除くこと。

レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。

毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

担当教員から指示のあった任意の歌曲集、アリア集など

科目名－クラス名

声乐

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	1～	通年	0	評価種別	100	0	0	0	0	100
				評価割合						

教育到達目標と概要

この科目は短大研究生の主科実技の個人レッスン(週1回60分)である。ベルカント唱法に基いた歌唱の技術を学び体得していくことを目標とする。これまでの勉強を更に発展させ、個々の能力・進度・楽器(声)に合った課題を勉強していく。実技試験は前期・後期とも「自由曲1曲(イタリア語のもの)※オペラアリアの場合Verdi以降の作品は除く(6分以内)」

実技試験の点数をもって評価とする。

学修成果

- ・歌唱の技術を理解し、ベルカント唱法の基礎力を向上させることができる。
- ・個々の楽器(声)に合ったレパートリーを作り、その演奏技術、様式感を身につけることができる。

授業展開と内容

第1回	呼吸、発声練習
第2回	共鳴、身体の使い方の練習
第3回	イタリア語ディクッション (音読)
第4回	イタリア語ディクッション (歌唱)
第5回	レチタティーヴォの歌い方 (レチタティーヴォ・セッコ)
第6回	レチタティーヴォの歌い方 (レチタティーヴォ・アッコンパニャート)
第7回	カデンツァ・修飾音などの歌い方
第8回	アジリタ・ポルタメントなどの歌い方
第9回	歌詞・作品の理解
第10回	歌詞・作品の理解と表現
第11回	時代・様式にあった音楽づくり
第12回	時代・様式にあった表現方法
第13回	前期試験曲の伴奏合わせ
第14回	前期試験曲の伴奏合わせ (暗譜)
第15回	前期試験に向けての総合練習
第16回	呼吸、発声技術の向上
第17回	共鳴、身体の使い方の向上
第18回	イタリア語ディクッションの向上 (音読)
第19回	イタリア語ディクッションの向上 (歌唱)
第20回	レチタティーヴォの歌い方の向上 (レチタティーヴォ・セッコ)
第21回	レチタティーヴォの歌い方の向上 (レチタティーヴォ・アッコンパニャート)
第22回	カデンツァ・修飾音などの歌い方 (ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第23回	アジリタ・ポルタメントなどの歌い方 (ロマン派の楽曲に多用される様々な形)
第24回	歌詞・作品の理解力の向上
第25回	歌詞・作品の理解と表現力の向上
第26回	時代・様式にあった音楽づくりの向上
第27回	時代・様式にあった表現方法の向上
第28回	後期試験曲の伴奏合わせ
第29回	後期試験曲の伴奏合わせ (暗譜)
第30回	後期試験に向けての総合練習

履修上の注意

実技レッスンのため、上記の授業展開は必ずしも学修の順序ではなく、個々の能力や進度によって何度も戻ったり、繰り返されたり、同時に進められたりするものであることを理解して臨むこと。

体調管理を怠らないこと。

実技試験でオペラアリアを歌う場合Verdi以降の作品は除くこと。

レッスンには伴奏譜の他、必要に応じて辞書など指示のあったものを用意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

譜読みだけでなく楽譜を読み込む勉強をし、その楽曲で知り得る予習は全てしておくこと。

オペラアリアを学ぶ場合は作品全体をよく研究すること。

毎日の練習を積み上げる努力をすること。

一日1～2時間を目安に予習・復習を行うこと。

教科書・参考書

担当教員から指示のあった任意の歌曲集、アリア集など

2022年度(後期・通年)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：0526 教員名：柴山 昌宣

1) 評価結果に対する所見

概ね学生達が学修に意欲的に取り組む授業運営、指導は順調に行われた事がアンケート結果から窺い知ることができる。また学生の自主的な授業参加態度はここ最近より良好になっている印象を受ける。

2) 要望への対応・改善方策

時間通りに授業が開始され進められていると言う問いに、少数ではあるがあまりそうではないと回答している事に対しては更に慎重に取り組まなければならない。

3) 今後の課題

アンケートに回答する学生が少ない事が大変残念です。やはり極力クラス全体会など教員の監視の元で行わせる必要があると思います。

以 上